# 22［評論］『哲学・航海日誌』

［１］　しばしば大人は子どもには①子ども向けの「神話」を語る。そこでは証券取引に関する常識はもちろん、恋愛についての常識も、ルネサンス美術に関する知識も語られない。あるいは、ａシャリンをもって走るものをすべて「ブーブー」としてくくるようなを子どもに向けて大人自身も発するだろう。そこにお子様向けの常識的世界像が形成される。そして子どもは、いったんはそこの住人になることを強いられる。つまり、「子どもらしい子ども」になることを強いられるのである。②そこではたる大人もまた、神話の神々として、すなわちうかぎりの「凡人」として、その世界に住むだろう。そうして、子ども向けの常識的世界像の中で対等のパートナーシップをつかむことによって、子どもに言葉を教えていこうとする。言語教育はそのまま「凡人たれ」という人物教育ともなっているのである。

［２］　もし言葉を学ぶことがこの凡人教育の段階にとどまるものであるとすれば、それはやりきれないものであるだろう。だが、ここで意味の自律性の弱い原理、すなわち使用の創造性が重要なものとなる。われわれは標準的言語使用にとどまっているわけではない。標準的言語使用の理解を利用し、そこから逸脱することによって、③字義どおりでない発話の力を生み出し、を用い、また皮肉を言ったり、冗談をとばすのである。それゆえ子どもはやがて神話から踏み出し、神話を逆手にとることを覚えねばならない。

［３］　ときに、子どもはｂタクバツな比喩を用いる者であるかのように語られることがある。例えば、脚のしびれに対して、「脚が炭酸になっちゃった」と言うように。私には子育ての経験がないので実感をもって語ることはできないのだが、私の偏見ではこれは実は比喩ではない。子どもはまだ大人の押しつける標準的言語使用をきちんと学びとっていないというだけのことにすぎない。その子はただ字義どおりの意味で「脚が炭酸になった」と言ったのである。そこには使用の創造性はない。それゆえｃキチも芸も言葉の美しさもない。それゆえ大人たちはこの誤解された凡庸さをうかつにえてしまうのではなく、それをいまの大人たちが共有している伝統的な凡庸さへといったんは押し込めねばならない。子どもが自覚的にはばたけるようになるために、無自覚にもっている④その翼をまずはもぎとらねばならないのである。

［４］　狭い意味での言語教育はここまでである。それは標準的言語使用を常識的世界観とともにたたき込むｄカテイにほかならない。だが、大人の教育者としての真価が問われるのはむしろここからだろう。大人はそこにおいてもはや教えてはならない。ノコギリを楽器として用いることを教えてしまったならば、それはたんにノコギリという楽器が神話の内に取り込まれるだけでしかない。お父さんが「塩がない」と言ったときには塩を手渡さなくちゃいけないんだと教えることは、ただ「シオガナイ」という音の標準的使用のひとつとして命令の言語行為を教えることでしかないのである。大人はただ、子どもが紋切型でない言語行為をし、紋切型でない比喩を作り出し、また紋切型でない皮肉や冗談を言ったときに、その「子どもらしくなさ」をでる観客であるしかないだろう。

［５］　ある人たちには、いまのわれわれの周囲には「変」なものが満ちあふれているように見えるかもしれない。だが、私の目にはたんに多様化したさまざまな「ふつう」が満ちているように見える。多様化されつつもなお、それぞれにそれぞれの「らしさ」を演じようとしているように見える。それは細分化され、自閉しつつ、最後には「自分らしさ」というなんだかわけの分からないものに行き着くのである。

［６］　伝統的な神話は確かに弱体化した。だが、神話へのはｅアットウ的にわれわれを縛り続けている。そうして伝統的な神話からはみ出した者たちは、自分を「ふつう」の者として位置づけてくれるような⑤新たな神話を作ろうとする。それはそれで別にかまわない。神話は不可欠なのだから。だが、自ら選びとった神話というものは押しつけられた神話よりもはるかにタチが悪いことを忘れてはならない。押しつけられた神話であれば、それへの反発からそれを逆手にとる力も生まれてくるだろう。それに対して自ら選びとった神話を逆手にとることは難しい。自分らしさへの偏愛は、態度をかたくなにし、足取りを重くする。

［７］　ここで私は「の精神」について思わずにはおれない。諧謔は常識のもとでのみ可能となる。だが、常識の中では不可能である。私には、⑥諧謔こそ、神話との戯れにおける最大の武器であるように思われる。

●出題校

上智大学

●語注

証券取引＝株券、債券などの有価証券を売買すること。

ルネサンス美術＝一四世紀〜一六世紀にかけてイタリアを中心として起こった、文芸復興の中で作成された芸術作品。

語部＝ある事柄を語り伝える人。

能うかぎりの＝できる限り、可能な限りの。

パートナーシップ＝ここでは「共同者意識」というような意味。

凡庸＝平凡で優れたところのないこと。

タチが悪い＝物事の性質が悪いこと。

■覚えておきたい語句

□10自律……………………自分で自分の行為を制御すること。

□11逸脱……………………本筋からはずれること。

□12字義……………………文字の意味。

□13逆手にとる……………通常とは逆の方法で対処すること。

□19凡庸……………………ごく平凡で特にすぐれたところのないこと。

□27紋切型…………………型どおりのやり方や見方。

□36不可欠…………………欠くことのできないこと。

□40諧謔……………………気の利いたおもしろい言葉。ユーモア。

◆漢字

　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　傍線部①の意味として最も適当なものを次から選べ。（8点）

ア　子どもにもわかるような形で大人の常識を語る。

イ　子どもにしか通用しないような言葉遣いをする。

ウ　子どもにもわかるような世界を作って教えこむ。

エ　子どもの常識でもわかるような事実のみを語る。

オ　子どもがするような空想を予想して伝えてやる。

〔　　　〕

問２　傍線部②の指示内容を、本文中の言葉を用いて、一五〜二〇字以内で答えよ。（8点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　傍線部③とあるが、これとほぼ同じ意味の語句を本文中から抜き出せ。（8点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問４　傍線部④とあるが、「翼をもぎとる」とはこの場合どういう意味か。三〇字以内でまとめて答えよ。【読みのセオリー】（10点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　傍線部⑤の説明として最も適当なものを次から選べ。（8点）

ア　紋切型でない言語行為によって、常識的世界像を逸脱していこうとする。

イ　常識的世界像から逸脱している自分の自分「らしさ」を正当化しようとする。

ウ　伝統的な常識とは異なる自分らしさである「変」をどこまでも追求しようとする。

エ　伝統的な神話とは異なる神話を自ら選びとることが不可欠であると見なす。

オ　伝統的な神話のようにわれわれを呪縛することのない柔軟で強固なものを探す。

〔　　　〕

問６　傍線部⑥と述べられる理由として適当でないものを次から選べ。（8点）

ア　諧謔は、多様化され自閉していく「ふつう」に逆らう能力であるから。

イ　諧謔は、常識へ反発し、それを逆手にとる力を与えてくれるから。

ウ　諧謔は、新たな神話に呪縛されつつ、その神話を批判できる能力であるから。

エ　諧謔は、常識を逸脱し、常識から踏み出す新たな力を与えてくれるから。

オ　諧謔は、自ら選びとった神話への偏愛に呪縛されることを拒む能力であるから。

〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ車輪　ｂ卓抜　ｃ機知　ｄ過程　ｅ圧倒

問１　ウ

問２　子ども向けに形成された常識的世界像（17字）

問３　紋切型でない

問４　標準的言語使用を学ばせ、伝統的凡庸さへと押し込めること。（28字）

問５　イ

問６　ウ

【読みのセオリー】

★評論の修辞表現

　修辞表現が多用される評論文はその意味を考えなければならない分、難易度が高い。しかし逆にいえば、それがわかれば読み解けるということである。筆者が伝えたいことは「どういうことか？」を常に考えて読もう。本文中で言い換えられている場合も多い。

【現代文読解用語200】

問　次の言葉の意味をそれぞれ後から選べ。

178パトス（　　）

179ロゴス（　　）

180エートス（　　）

181イデア（　　）

182ドクサ（　　）

183ドグマ（　　）

ア　論理・思想などの理性的な心の働き。

イ　感情的・激情的な精神。

ウ　習慣・性格などの持続的な心の状態。

エ　理性によってのみ認識されうる実在。

オ　根拠のない主観的意見。

カ　独断的な意見。

【解答】

178イ　179ア　180ウ　181エ　182オ　183カ

〔要　約〕

　「神話」からの逸脱の必要性と、そうしたあと問題となる「自分らしさ」について、6・7段落を中心に統一してまとめる。

　　　　　↓

　子どもは大人の神話から逸脱し子どもらしくなくなることで発話の力を生み出す。しかし、そうやって自己選択した神話は、逆手にとるのが難しい。常識のもとでのみ可能な諧謔こそが、その神話を崩す最大の武器となる。（100字）

〈筆者＆出典〉野矢茂樹（のや・しげき）一九五四（昭和29）年東京都生まれ。哲学者。東京大学大学院教授。毎年、夏に開講される「科学哲学」は東大の人気講座。「哲学」や「論理」を、平明でわかりやすい文体で説明した入門書を多数執筆。中でも『論理トレーニング』は有名。本文は『哲学・航海日誌Ⅱ』（中公文庫、二〇一〇年）より。

☆「セオラム　補充問題」問題は次の３種類があります。

　＊差し替え　　　……　当該の問と差し替えるもの

　＊追加　　　　　……　同じ問いで追加された問題

　＊新問　　　　　……　追加が可能な新たな問題

＊新問

問　6行目「能うかぎりの『凡人』として、その世界に住む」とあるが、大人はなぜそうするのか。その説明として最も適当なものを次から選べ。

ア　子ども向けの常識的世界の中で、子どもらしい言葉を教えていくため。

イ　子どもの持つ常識に合わせて、幼児語をうまく引き出してあげるため。

ウ　子どもでは話せない大人びた言葉を、大人自身が話してあげるため。

エ　子ども相互に差が付かないように、みんなに平等に言葉を教えるため。

オ　子どもに「その世界」のことを、分かりやすく理解させてあげるため。

［答］　ア

＊新問

問　23行目「大人の教育者としての真価」とはどういう意味か。その説明として最も適当なものを次から選べ。

ア　子どもが創造的な言語使用へと飛躍したとき、それを見極め見守ることができるか。

イ　子どもが比喩とは言えない比喩を使ったとき、それを禁止させることができるか。

ウ　子どもが常識的世界から飛び出そうとするとき、援助してあげることができるか。

エ　子どもの言語使用を機知に富むものかどうか、きちんと評価することができるか。

オ　子どもの世界が、実は大人が作り出したものであると打ち明けることができるか。

［答］　ア

＊新問

問　36〜37行目「自ら選びとった神話というものは押しつけられた神話よりもはるかにタチが悪い」とあるが、その理由を本文中の語句を用いて、簡潔に説明せよ。

［答］　（自ら選びとった神話は、）逆手にとることが難しく、むしろ「自分らしさ」を守り、創造性を鈍らせてしまうようになる（から。）

■要約の方法　★形式段落ごとの内容をまとめる

［１］　大人は、まず神話を語ることで子どもに常識的世界像を形成させる。その中で対等のパートナーシップをつかむことによって、言葉を教えていこうとする。

［２］　しかし子どもは、大人が語った神話から踏み出し、神話を逆手にとることを覚えねばならない。

［３］　そのために大人たちは、創造性のない子どもの比喩をうかつに讃えるのではなく、子どもの言語使用を、自分たちが共有している伝統的な凡庸さへといったんは押し込めねばならない。

［４］　その上で大人は、子どもが紋切型でない言語を使用したときに、その「子どもらしくなさ」を愛でる観客となるべきである。

［５］　われわれの目の前にある多様化したさまざまなものは細分化され、自閉しつつ、最後には「自分らしさ」というわけの分からないものとなる。

［６］　自ら選びとった、自分を「ふつう」の者と位置づけてくれるような神話は、逆手にとることが難しい。

［７］　神話との戯れにおける最大の武器は「諧謔の精神」である。

《段落の構成を考える》

話題が二つに分かれていることに気づくこと。

［１］〜［４］段落　子どもの言語使用を例に、人が神話を与えられ、常識的世界像を形成して、それを逆手にとるまでの過程。

［５］〜［７］段落　自分を「ふつう」の者として位置づけてくれるものを求め、自己選択した神話は、逆手にとるのが難しい。そのとき、常識のもとでのみ可能な「諧謔」は、その神話を崩す最大の武器となる。

　話題の中心、つまり、柱の段落は、後半の［６］・［７］段落。この段落を中心にまとめるとよい。

　　　　　↓

■本文の要約■

子どもは大人が語る神話から逸脱することによって、字義どおりでない発話の力を生み出す。しかし、自己選択した神話は、逆手にとるのが難しい。常識のもとでのみ可能な諧謔こそが、その神話を崩す最大の武器となる。（100字）